

(出所) 新熊本市史通史1巻

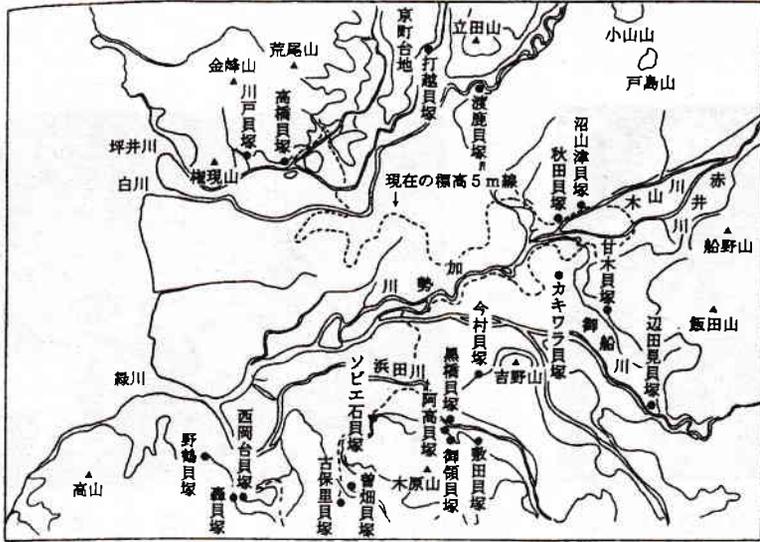


図 3・03 熊本平野の貝塚分布

三 校区別文化財・史跡

二一・一 秋津校区

わたしたちのふるさと秋津校区は、秋津地区(秋津・若葉・桜木・桜木東校区)の母なる校区である。

藩政時代より秋津川沿いの台地上に形成されていた沼山津・中無田・下無田(新村)の三集落を基幹として熊本市の東部発展に伴い、漸次開発都市化が進んでいる所である。

校区は、「秋津一〜三丁目・東野一〜四丁目・沼山津一〜四丁目・秋津新町・秋津町秋田の全域と若葉二丁目の一部」を範囲とし、世帯数四千九百四十戸・人口一万三千百七十九人(平成十四年二月一日現在)である。

〔考古遺跡〕

- 1 下津代里遺跡 (マップ番号 2)

所在地 熊本市沼山津二丁目

熊本市の遺跡地図には範囲が示されている。しかし熊本市史にも弥生時代の遺跡と記されているのみでそれ以上の記述はない。

- 2 沼山津貝塚 (マップ番号 3)

所在地 熊本市秋津三丁目一七〇一(一三八七番地)

貝塚の南面には秋津川が流れ、水面からの高さは二桁余である。

(出所 新熊本市史通史1巻)

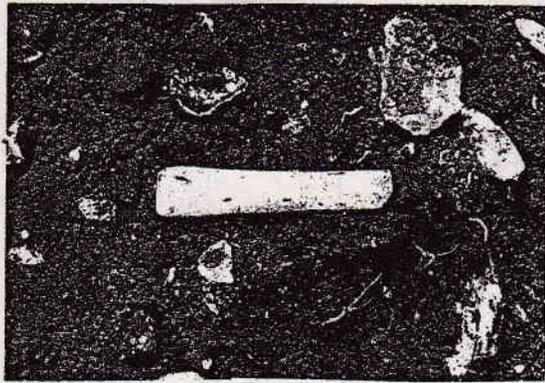


写真3 0骨 2製 へ 沼の 山の 津出 貝土 塚状 熊

(昭和43年)



写真3 0 1 沼 山発 津掘 貝調 塚査 風景

貝塚の標高は約五・五メートルで、現在の海岸線(有明海)とは一五・五メートル隔たり、典型的な縄文海進期の貝塚である。

当貝塚は昔から「貝原(きゃあばる)」との字名で「此の地一二尺を掘れば貝殻を出さざるなし。蓋し往時この辺一帯人海なりしならんか」と云われ、又昭和五年(一九三〇)秋津小学校南側の畑を切り下げ、耕地整理中に無数の石斧が出たことが知られている。このように昭和初年から存在が知られていたが、その後所在は忘れられていた。

昭和四十三年(一九六八)秋津浄化センターの貯水槽拡張工事に伴う事前調査により、一部発掘が行われ、縄文中期より後期前半までを主体とする遺跡であることが確認され、十歳くらいの埋葬された小児人骨も発掘された。(北枕、西向き屈葬、上に石)なお貝塚は同四十二年客土によって覆土され、全貌を知ることが出来ない。

自然遺物はハマグリが主体で、カキ及びヤマトシジミがそれに次ぎ、若干のバイガイと獸片を見た。主な出土品は次の通り

出土土器

「阿高式・並木式・南福寺式・出水式・御手洗A式・鐘ヶ崎式・北久根山式」など縄文中期初頭から晩期初頭の阿高式系や鐘ヶ崎式系の縄文土器

土製品

土錘(石のおもり)

石器

石鏃(やじり)・石匙(石のナイフ)・磨石(木の実などをすりつぶす石)・石皿・凹石

骨角器

骨製のへら

周辺の阿高式系の土器を出す遺跡としては熊本市江津湖遺跡・熊高敷地内・下益城郡城南町阿高貝塚などを挙げることができる。

また、縄文後期前半の鐘ヶ崎式土器を伴う周辺の貝塚には上益城郡嘉島町カキワラ貝塚、同郡御船町甘木貝塚などがあり、縄文海進の線をたどる貴重な遺跡とみてよい。

(日本歴史地名体系 熊本県の地名・熊本市東部文化財調査報告書)

〔土寸社〕

3 竹内神社 (マップ番号 12)

鎮座地 熊本市沼山津四丁目一番 (上津代里)

鎮座地 熊本市沼山津四丁目二番 (上津代里)

祭神 少彦名神

県道木山線と小池竜田線の交差点から南へ折れると、まもなく東入小路の奥にある。  
(沼山津神社を南へ約百五十竈) もと「年彌社」と呼ばれていたが、明治以降「竹内  
(たけのうち)神社」と呼ばれるに至ったものである。

社殿は、二間四方妻入りの拝殿と二間四方平入りの神殿を組合わせてある。屋根は瓦葺  
きで、瓦の紋は違い鷹の羽である。

拝殿には明治二十年(一八八七)の社殿造営の寄附付けがあり、絵馬も同年以降のものば  
かりで、明治二十年の造営で面目を一新したようである。

本社は牛馬の神として、農家の信仰が厚く、奉納された絵馬すべて馬の絵である。時代  
の移り変わりで、さびれて何枚かは失われている。

拝殿左の手水鉢は凝灰岩製で、「天保八年(一八三七)当村若者中」の銘がある。  
社殿右には、周囲四・七竈の榎の大木が往時を偲ぶかのように生い茂っている。

別名「馬ん神さん」とも呼ぶ。

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史)

4 中無田熊野座神社 (マップ番号 19)

鎮座地 熊本市秋津三丁目四番三八号(一八六四番地) (上丁)

祭神 伊奘諾尊

伊奘册尊

速玉男之神

注記

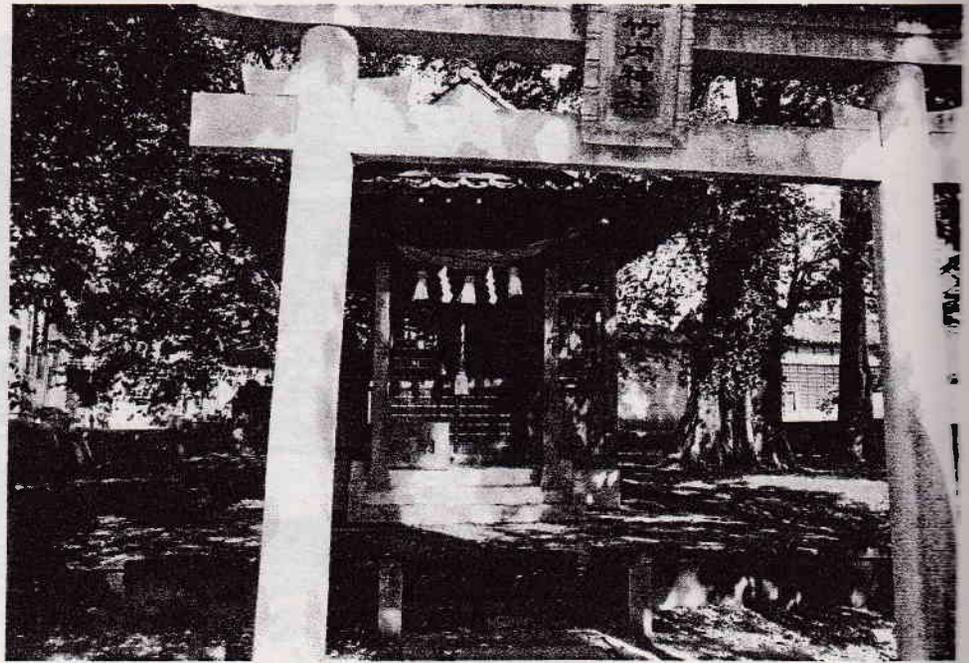


写真 3・03 竹内神社

竹内神社は、平成に入って改築されており、  
右の写真は改築後である。

秋津村誌によれば慶長十八年(一六一三)の創始となっている。

秋津小学校の南、秋津川のほとりに、大木に囲まれた森の中にある。境内も広く、石垣の  
上に石の玉垣をめぐらして正面鳥居は南面している。

拝殿には下り藤の紋がついており、奥の神殿の棟には藤輪の中に違い鷹羽の紋がつけら  
れている。(注 昭和四十六年二月二九日の調査時点・現在は平成に入って社殿が改修  
され、本来の下り藤の紋のみに直されている)

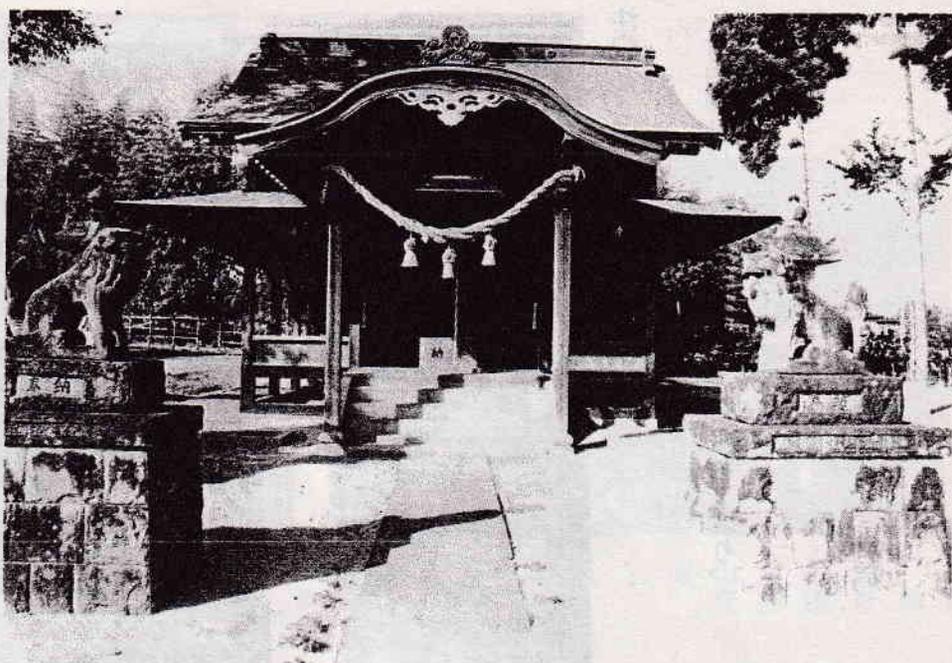


写真 3・04 中無田熊野座神社

注

明治は、明治四五年七月三〇日に大正に改元されている。一月はまだ明治四五年（一九一二）

昔から、中無田の鎮守の神様として信仰が厚い。神社の神殿・拝殿とも沼山津神社と同規模のものであり、社殿は天保七申年（一八三六）の改築とも伝えられている。

寛文の国郡一統志にも「中無田ニ権現アリ」と、肥後国誌にも「権現宮祭九月十九日氏神ナリ」とある。

境内の石灯笼に「元文二丁巳曆（一七三七）八月十九日 奉寄進下産子中」の刻銘がある。

一・三百年経ったと思える大木が、神社の厳かさをもしだしている。境内の大棟は目通し周囲四四二杉を計る。

昭和三十七年（一九六二）に三五〇年祭りが行われている。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史）

当神社には御神体の外に、「僧形神像三体」も併せ祀られている。

神殿内の柱には、今なお西南戦争時（四月十四日と思われる）の、いわゆる西郷弾痕が打ち込まれたままになっている。

明治四十五年（一九一二）一月 三〇〇年季の鳥居が氏子中により、大正十年（一九二一）には齊藤光太郎により手水鉢石が、昭和十二年（一九三七）七月には中山傳吾・ジツにより、灯笼一對が寄進されている。

さらに、昭和十二年（一九三七）に祝詞所・弊殿・拝殿が改築されている。

寄進者の名前を刻んだ玉垣で境内が囲まれているが、昭和三年（一九二八）に昭和天皇の御大禮を記念して西及び南側垣が、平成十年（一九九八）には神社創建三八五年を記念して東側の玉垣が寄進された。

又、昭和三十七年（一九六二）一〇月には、三五〇年祭が行われると共に、三五〇年祭記念碑が建立され、吉本平太郎・高宮政吉により三五〇年記念の狛犬一對が奉納されている。平成十年（一九九八）五月には、傾きつつあった鳥居が移設修正されている。

目通し周囲四四二杉を計る境内の大棟は、熊本市指定保存樹木（昭和五十一年第六十一号）となっている。

大正元年（一九一二）の大洪水記念樹の銀杏もすでに大木となっている。昭和四十七年山本藤太郎によって建立された「大正元年大洪水記念銀杏植樹の記念碑」には、次のように記されている。

明治は、明治四五年七月三〇日に大正に改元されている。一月はまだ明治四五年（一九一二）

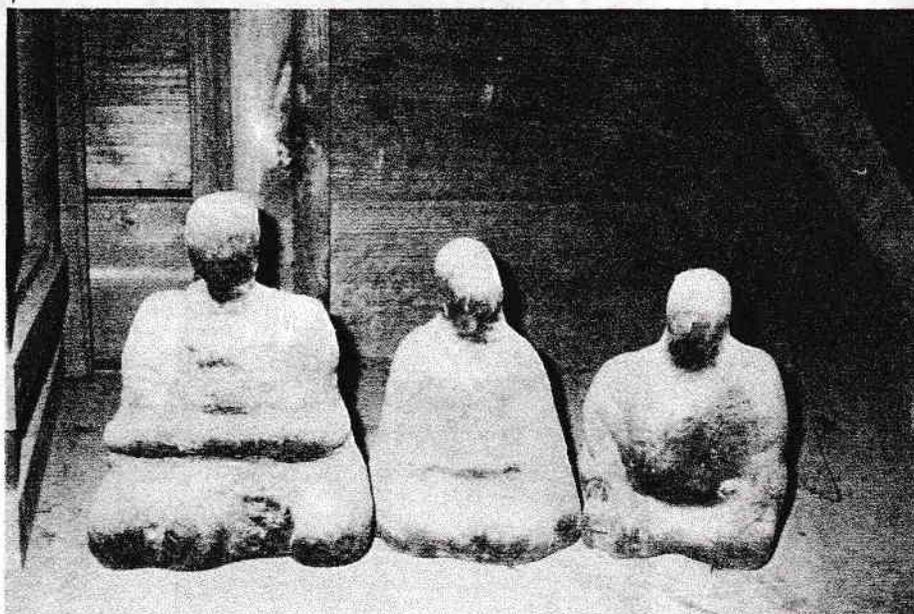


写真 3・05 中無田熊野座神社僧形神像三体

大正元年（一九一二）の大洪水記念樹の銀杏もすでに大木となっている。昭和四十七年山本藤太郎によって建立された「大正元年大洪水記念銀杏植樹の記念碑」には、次のように記されている。

この銀杏樹は、大正元年八月の大洪水の砌り、水勢甚だしく濁流は境内を満々と浸し、舟にて社殿を周遊せり。  
この大自然の猛威を記念して田島久次郎・山本藤太郎の両名にて植樹せしものなり。  
後年毎々大出水あれど 此の時の大洪水に及ぶもの昭和の今日に至るまで遂に見たことなし。  
昭和四十七年八月建之 山本藤太郎

平成元年（一九八九）鷺川改修で境内が一七六一平方メートル買上げられた。その代金で社殿の大改築が行われ、平成三年（一九九一）六月完成したが、その記念碑の台座には次の様に記されている。

地域の氏神として多くの尊崇を集め、中無田の歴史と共に栄えて来た当神社も鷺川改修工事計画によって境内割譲のやむなきに至り、氏子一同合議の上、此の補償費をもって基金

とし、御即位奉祝記念行事と併せて屋根銅板張り替え並びに社殿の修復を行い、貴重な遺産を後世に残す為記念碑を設立する

平成二年七月着工  
平成三年六月成就

改修が完成し、平成三年十月五日に落成式を行う予定で準備を進めていたが、九月二十七日の台風一九号。熊本気象台観測初の最大風速五二・六m/sで境内の古木の大部分が吹き倒され、その倒木で折角修理した社殿が大被害を被る。  
落成式どころではなく、翌四年再び修理することになった。

平成十一年（一九九九）九月二十四日、再びの台風十八号で辛うじて残っていた椋の古木が途中から吹き折れる。幸いに社殿と落成記念碑すれすれの所に大木の枝が落ちたので危うく大きな被害にならずに助かった。

二、三百年栄えてきた杉・椋の大木は二回の台風で無くなってしまい、東側に一本の椋の古木が残るだけになった。元六本あった保存指定木はこの一本のみとなった。

たび重なる台風でなくなった、かつての杉のなかには、寛政十年（一七九八）から四年

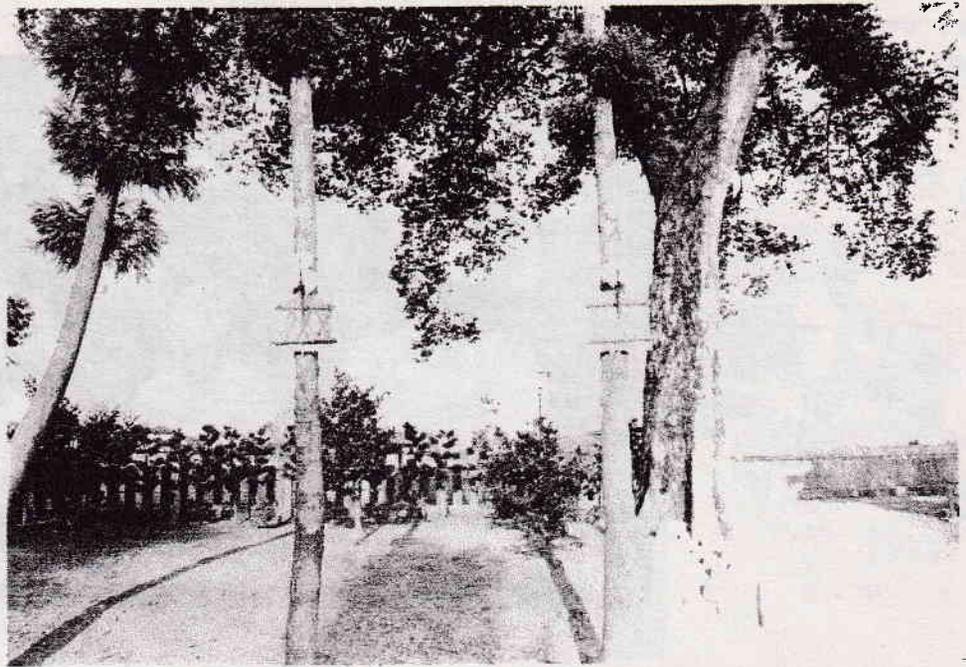


写真 3・06 三社独特の吉田司家追風座

注記

沢田直助

寛政十年（一七九八）から中無田村庄屋

享和二年（一八〇二）から沼山津村庄屋

文化七年（一八〇七）から苗字御免御惣庄屋

直触を勤める

間中無田村の庄屋を勤めた「沢田直助」が、村の平和と発展を記念して寄進した杉もあったと思われる。

「沢田直助略書置 文政六年末（一八二二）八月」には次のように記している。

沢田直助略書置 文政六年末（一八二二）八月 の中から（意識）

中無田神社内に仕立ててある杉は私が寄進したものです。

私が中無田村の庄屋になった寛政十年（一七九八）頃は、村中殊の外零落して、村内には貫の通った家は五・六戸しかなく、他は皆堀っ立て小屋ばかりで難渋している上にいつも口論が絶えなかった。

この杉が繁る頃は、争いも途絶え、村方全部の人が貫の通った家に住めるように、又、村中が弥栄えることを願ってこの杉を残し庄屋役を辞します。

祭日は九月十九日。

なお当日は藁を四〇度角に編み、それを割り竹で抑えた「吉田司家（通称追風）座と言われるものが、二本の神木に飾られている。これは秋津地区の沼山津神社・西無田雨宮神社（熊野座神社）三社に見られる珍しい祭祀である。

大被茅の輪くぐりは六月下旬・宮座は十月五日に行われている。

注：1 西南戦争時の西郷弾の弾痕

明治十年四月十四日と思われる。御船方面の戦いで破れた薩軍の一隊が、橋を壊しながら木山へ集結する途中、中無田を通過するとき、村の世話役三藤孫四郎らに、食料の提供や道案内を強要する。薩軍への協力を躊躇していると、中無田神社に向けて実弾を発射して、村民を震えあがらせ、言うことを聞かないと火を放ち村中を焼き払うと脅して慥力させた。中無田神社の神殿内の柱には、西郷弾が打込まれたその当時のままになっている。

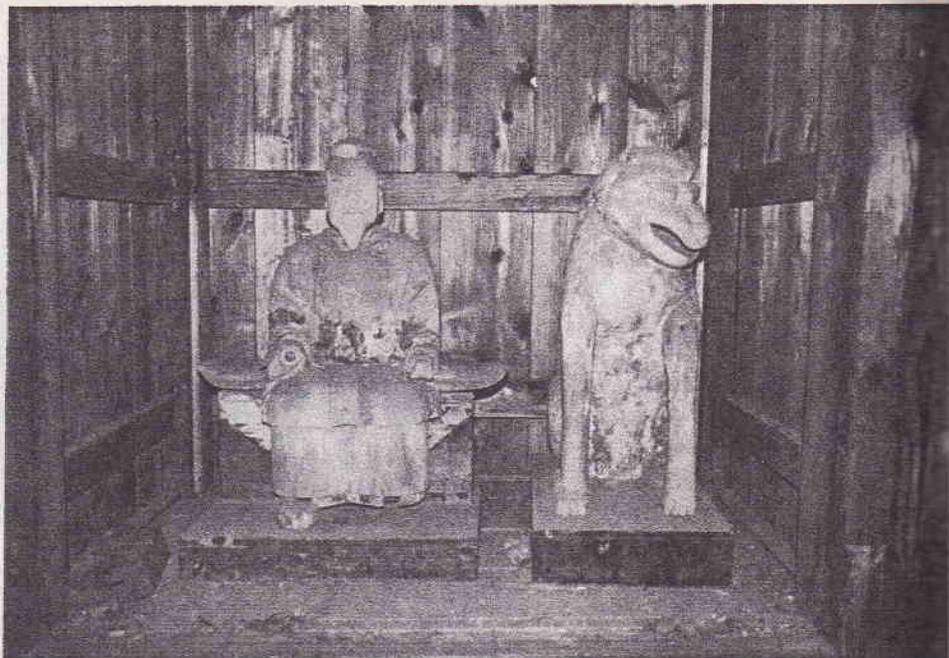


写真3・07 中無田熊野座神社の狛犬

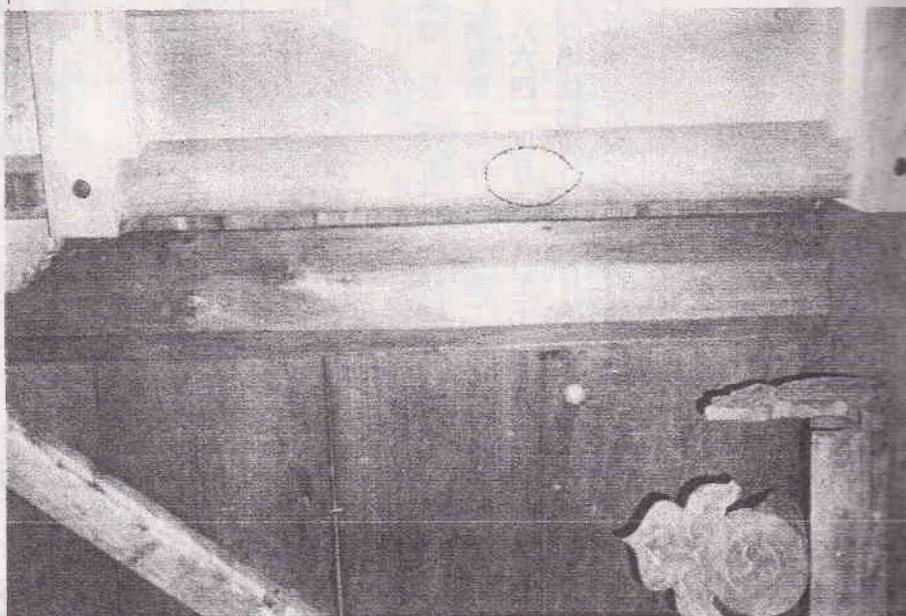


写真3・08 西南戦争時の西郷弾の弾痕

5 福秀山光輪寺 (マップ番号 13)

所在地 熊本市沼山津四丁目八番七号(上津代里)

真宗本願寺派・本尊 阿弥陀如来

(語りべ学習会)

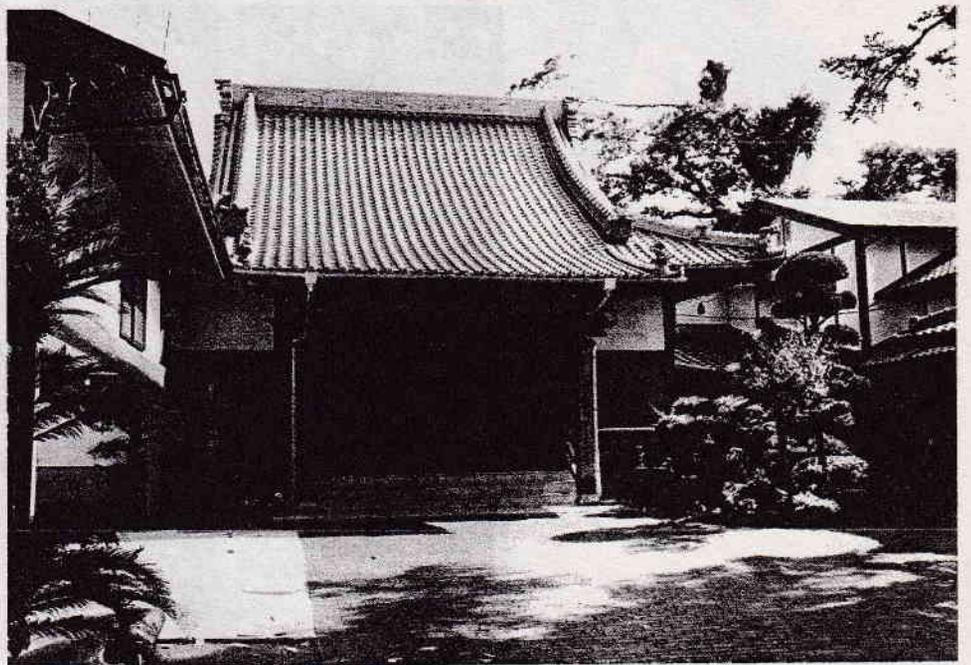


写真 3・09 光輪寺

注記

親鸞上人御正忌

旧暦二月二八日なので現在は新暦で  
一月二六日とされている

小楠公園より南へ約六百メートル左奥。

寺は熊本順正寺の法弟である明義が、明暦三年（一六五七）一代僧業の許可を得た。その後、法榮まで十一代願い続けたので世襲となり、明治十年（一八七七）八月七日願いによって、永代庵室の公許を得て、初めて「千福庵」と称し、順正寺の末庵となる。

明治十二年（一八七九）七月二十三日、寺号公称の許可を得て「光輪寺」と改めた。

同十三年（一八八〇）四月二十九日、本派宗規綱領に基づき本山直末に編入されている当時の御本尊は、元禄十三年（一七〇〇）当庵の本尊であった十一面観世音を改め、阿弥陀仏の木造を本尊として本堂に安置した。

又、寺伝によれば、山田入道正信の開基というが、年代は明らかではない。小西行長肥後領国の時代に焼かれ、文禄三年（一五九四）に、再建されたと伝えられている。

光輪寺は通称「沼山津の上（かみ）の寺」と言われている。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史）

当寺の御本尊について上益城郡誌には次のように記されている。

元禄十三年（一七〇〇）七月十二日当庵の本尊たりし十一面観世音を改めて  
阿弥陀仏の本尊となす 木像の銘に曰

肥州益城郡六嘉村龍福寺之住 釈良閑 二十五歳

本尊 長二尺五寸 慈續大師御造

仁者延暦十三年（七九四）生 仁壽四年（八五四）往 延暦寺座主貞観六年

（八六四）正月十日至子□手結印□誦此首右□而逝年七十一□終念阿弥陀念諸

門同唱依勸流行八年七月給□慈□大師往如来上人元文四年（一七三九）四月五日

七高僧上宮太子御影及右御影御□に光輪寺の寺號依願下賜（五世智南）

親鸞上人御正忌法要は十二月十六日から十八日まで、なおお取越しは十二月上旬に行われ  
ている。

（語りべ学習会）



写真 3・10 浄福寺

所在地 熊本市沼津三丁目八番五五号 (下津代里)  
真宗本願寺派・本尊 阿弥陀如来

沼津津会所跡の西三〇メートルの処に、浄土真宗本願寺派浄福寺がある。

往古は天台宗で、本堂ならびに鐘楼門などがあるが、創建時代は明確ではない。しかし元亀二年(一五七二)に木山城主備後守惟久が再興したことは記録にある。(※注記参照)

天正年間(一五七三〜一五九一)の兵乱に罹り、堂宇等すべて消失したが、当時の住職慈観が辛うじて仏像のみを土中に埋め置き、その後観清と一小堂を建立して本尊を安置した。比叡山延暦寺の末流で、本堂には薬師如来、脇に観音菩薩があって、草創以来何年経っているかは不明。

慈観より三代目の観清の頃までは、天台宗であったが、その弟子秀海に至って慶長十八年(一六一三)に改宗。秀海が浄福寺の初代の住職になって現在に至っている。

創設は戦国期より古いが、現在の建物は新しく、山門も明治四十一年(一九〇八)の建立である。

寺の裏手には、広大な共同墓地がある。十七世紀中葉から十八世紀中葉にかけてのもので、庶民の墓としては、かなり古いものばかりである。

承応二年(一六五三)・万治二年・天和二年・貞享・元禄・宝永・正徳元・享保・元文・寛保などの年号が記録されている。

通称、浄福寺のことを「沼山津の下(しも)の寺」と言われている。

(秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史)

※注記 (上益城郡誌による)

□□御札之写 元亀二年未天

生者天迦陵□伽聲頼主 木山備後守惟久

奉□□南浮□扶桑朝四海□肥之後州□風山浄福寺□□我等今敬禮

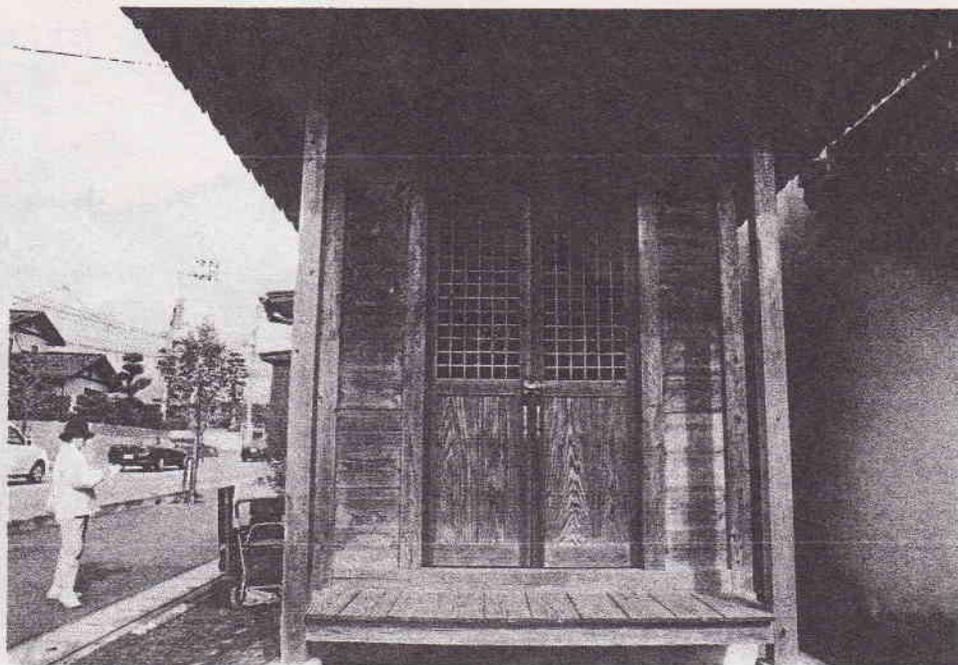


写真 3・1・1 妙見社 妙見さん

なお『熊本市史 別編第二巻 上益城郡誌 沼山津村』によれば『熊本西光寺の法弟である秀海が、一代僧業の許可を得た。その後願い続けたので世襲となり、明治十年（一八七七）八月願によって、永代庵室の公許を得て、「浄光庵」と称し西光寺の末庵となる。

明治十二年（一八七九）七月、寺号公称の許可を得て、浄福寺と改めた。同十三年（一八八〇）四月、本派宗規綱領に基づき、本山直末に編入されている。』と記されている。

親鸞上人御正忌法要は一月九日から十日まで、なおお取越しは十二月に行われている。

（語り部学習会）

〔堂主 宇子〕

7 妙見社（妙見さん）（マップ番号 14）

所在地 熊本市沼山津四丁目五番四五号（上津代里）

沼山津の中津代里の第一公民館前にある小堂で妙見さんと呼び、俗に「火の神さん」と言う。

社殿は小さいが男女神像各二体、つまり二対の神が鎮座されている。墨書銘としては女神像一体の背部に「願主 九右衛門」とあるのみで、他には紀年その他の徴すべきものがない。

国郡一統志には妙見は記載がなく、肥後国誌には「妙見宮」と見えているので江戸中期に祀られたものと考えられる。

この付近は湧水地帯で、現在でも井戸は浅くて自噴するので、妙見を祀るのも故なしとしない。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史）  
開基 建立年月不明

堂 新築落成 平成元年（一九八九）十二月吉日、奉納者一八名の名前がある



写真 3 ・ 1 2 妙見社の神像

開基 建立年月不明  
堂 新築落成

平成元年（一九八九）十二月吉日、奉納者一八名の名前がある

堂高

間口×奥行

軒下まで三〇六センチ 内基礎高四〇センチ  
二一四センチ×三三二センチ

木造瓦葺き、堂に妙見社の額が掲げてある

右より男神像・女神像・男神像・女神像

男神 衣冠束帯座像 黒・紺色などで彩色 木造

二体とも 高三二センチ 膝張二〇センチ 肩幅一五センチ 顔高九センチ

顔幅七センチ

束帯座像 ピンク色等で彩色 木造

二体とも 高二五センチ 膝張一五センチ 肩幅一四センチ 顔高九センチ

顔幅七センチ

像を祀ってある箱に、「奉納者 明治十四年二月一三日生

酒井百喜 七八歳 とり 昭和六十三年十月吉日」と記入

（語りべ学習会）

その他

8

中津代里薬師堂 （マップ番号 15）

（通称 堂ん前の観音さん）

所在地 熊本市沼山津三丁目一〇番 （中津代里）

小池く御船行き産交バス沼山津停留所横。大きさ正面九尺、奥行六尺の木像瓦葺きで仏堂の形をそのまま残している。

正面に両開きの格子戸がある。中の須弥壇には、本格子がはめられ、その中に二体の仏像が、各別の厨子に安置されている。

左の厨子は、薬師如来立像で、右手は下にさげて与願印をとり、左手に薬壺を捧げている。右の厨子には、聖観音座像である。「国郡一統志」の沼山津村の条に「薬師」とあるが、これに当たると推定される。

建物は、往時の物とは思えないが、修復する際は大体同じ大きさに建てるものと考えられる。

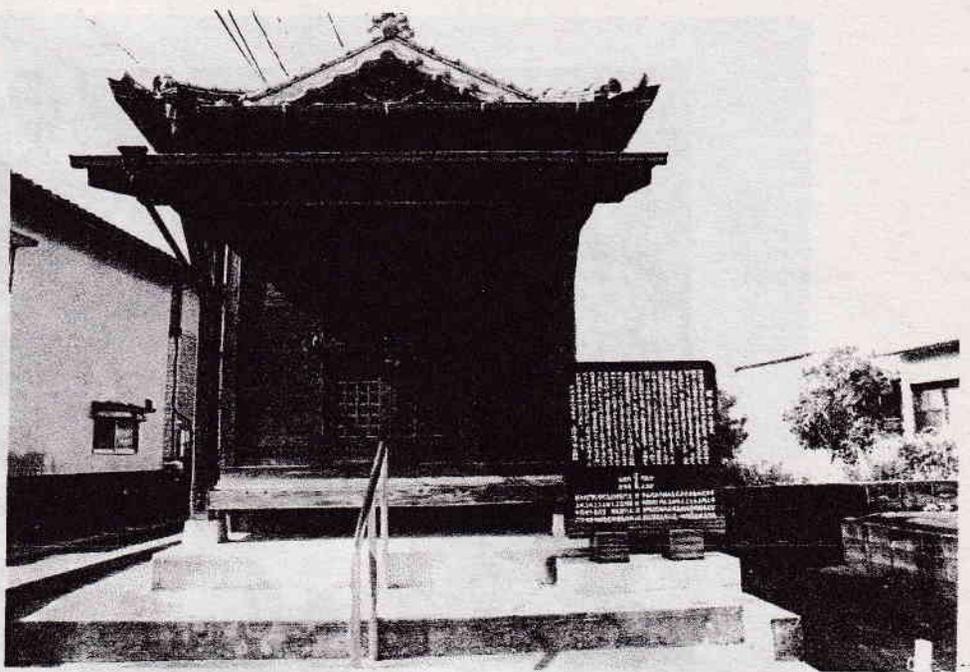


写真 3 ・ 1 3 中津代里薬師堂

〔注記〕

嘉永八卯は、嘉永六年（一八五三）一月二七日に安政に改元されているので、実際は安政二年（一八五五）に当たる。

古文書の記事と古老の口伝で、浄福寺が以前、中津代里にあったと言う事、薬師堂の供養を、代々浄福寺が続けている事から考えても、薬師堂の二仏は、往時の浄福寺の御本尊であると思われる。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念雑誌 秋津の歴史）

9 下津代里玉稲荷神社 （マップ番号 17）

所在地 熊本市沼山津二丁目一四番（下津代里 一六二〇番地）

沼山津二丁目一四番七七号（一六二〇番地）、四時軒入口の二十餘程西の道角の稲荷社である。

三尺四方の小堂内に一木像の女神座像が安置されている。像高十五呎 顔高三呎 顔幅二・五呎 肩幅九呎 膝張りは左右欠損しているが、現存一〇呎を計る。又、はめこみの両手を失っている。

像の底面に「嘉永八卯二月一日奉彫刻仏師宮武（花押）」の墨書銘がある。この女神像を納めたと思われる木箱が前に置かれており、正面には「勸請宇迦之御魂神」右側面には「明治十四年（一八八一）二月吉祥日 沼山津神社祀掌古賀喜三太藤原辰臣」と墨書されている。

（熊本東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

10 鶯 観 立日 堂主 （マップ 18）

所在地 熊本市秋津三丁目一番

秋津三丁目の中無田集落の東北部にある正面二間、奥行一・五間の仏堂である。堂の棟木には明治二十七年（一八九四）甲辰三月五日の棟札がある。

本尊は木像座像で頭部に九つの顔があり、十一面観音としか見えないが両手を重ね合わせて親指を合わせており、胎藏界大日の法界定印か釈迦の禪定印か薬師の薬壺印である。像高は四十六呎 膝張り二十七呎 肩幅二十二呎 顔幅八・五呎である。

〔注記〕

古賀喜三太藤原辰臣は、沼山津神社の祀掌  
「六・ふるさとの人物」の項参照



写真 3 ・ 1 4 下津代里稻荷社

さて新指を合せておき、胎蔵界大印の法界定印か釈迦の禪定印か薬師の薬壺印である。  
像高は四十六釐 膝張り二十七釐 肩幅二十二釐 顔幅八・五釐である。

その傍らに腰から下が腐食してなくなった正体不明の仏像がある。全面に磨耗しており、頭と両手が判別出来るだけで、判定の材料になるものが全くないが、これまでの腐食仏に對比すると地蔵の公算が強い。

残高二十七釐 厚み九釐 肩幅十七釐 顔高八・五釐 顔幅五釐である。

なお堂の前に古賀氏の墓地があり、十基程の墓がまとめられている。享保を最古として元文・宝暦などの紀年銘の墓や古賀作十郎の墓が見える。

(熊本市東部文化財調査報告書)

### 鶯観音 野原山放光庵

秋津小学校の西方丘陵にあり、俗に鶯観音と言う。

永祿八年(一五六二)阿蘇大宮司家 益城郡御船城主 甲斐明部大輔親直(宗運) 託麻郡竹宮に鶯城を築き、その与力甲斐飛驒守正運を以て居城せしむ。

正運入城して先ず一字の伽藍を建立し、瀧川村邊田見(現御船町辺田見) 黄海山東禅寺 洞春和尚を招きて開基として黄鳥山法光寺と号す。洞春和尚は両寺兼職し、十一面観音・薬師・甲斐正運像を自刻し、仏殿に安置す。

爾来次第に繁盛せしが天正十五年(一五八七)二月豊臣秀吉九州征伐として大軍を帥いて薩州を攻め平ぐ。同年五月帰国の途中大勢入来り、所々の城を攻め落とす。此の時甲斐正運降参して城終に陥る。同時に佐々陸奥守成政に限本城を賜ひ、成政入城の後当寺焼失す。

天正十六年(一五八八)閏五月清正公入城以来、同十七年領地巡検の際、本尊民家に勧請しありを今の地に一堂を建立し、番僧を置き野原山放光庵と号せしとなり。

明治の初土地改正の行はるまでは鶯の地は、託麻郡健軍村に属せり。堂中一の位牌あり。左の如く記す。

大慈七十八世再中興當庵開山大梅常大和尚禪師

延享三丙寅年(一七四六)七月二十三日

□寂 放光庵

(野田幸平手記より)

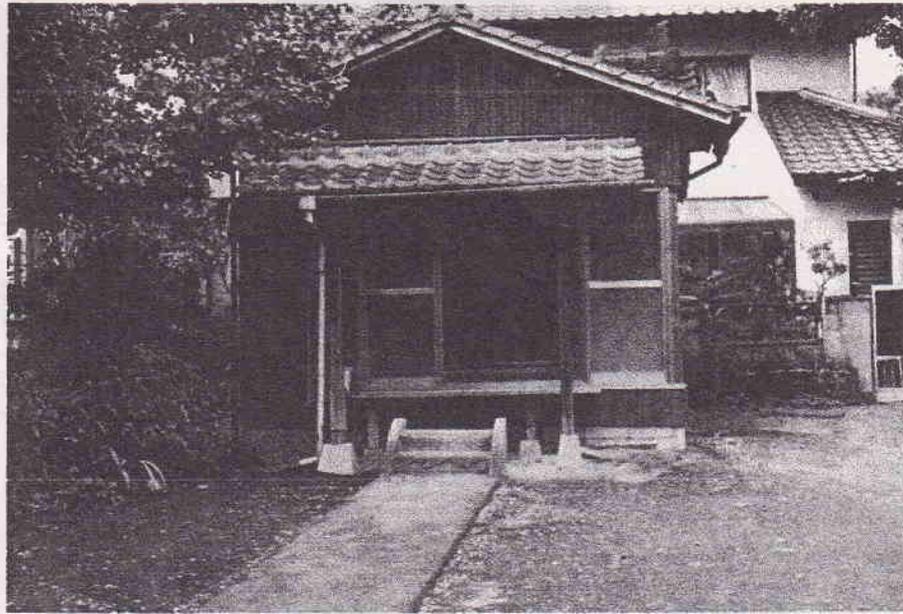


写真 3 ・ 1 5 鶯 観 音 堂



写真 3 ・ 1 6 鶯 観 音 堂 本 尊

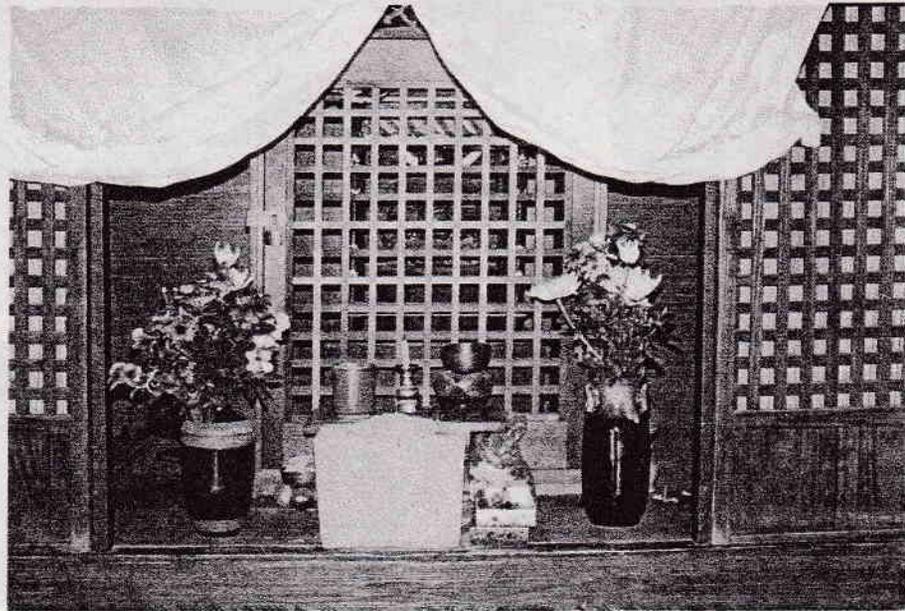


写真 3 ・ 1 7 野間薬師堂

11 野間薬師堂 (マップ番号 20)

所在地 熊本市秋津一丁目一番七四号

秋津一丁目一番の四っ角にある小堂で野間の薬師堂と言われている。

お堂は昭和五十年(一九七五)九月に改築されているが、年代などは不明。

お堂の前の手水鉢は、明治三十八年(一九〇五)十一月一二日に奉寄進されている。

開基 建立年月不明

堂 木造瓦葺き 間口二・〇四m 奥行三・五m

薬師像 木造 円光背 印相薬壺印

座像約三〇cm 膝張り約一五cm 肩幅一三cm 顔幅約五cm

(扉が開かず正確に計測できず)

手水鉢 明治三十八年旧十一月二日 □□□中 と記銘され、幅五〇cm

高さ二六cm 奥行二七cm

(語りべ学習会)

12 新村 天 満 宮 (マップ番号 21)

所在地 熊本市東野一丁目三番七七号 (公民館敷地内)

東野一丁目の第五公民館の前にある小堂で新村の天神さんと呼ばれており、お堂は第五公民館の改築の際、現在地に移転改築されている。

神殿には、左側は天神・右側は観音菩薩の二体が祀られているが、年代等不明。

また集落移転と同時に祭祀したものか、また移転集落形成後祭祀されたのかも不明。

慶長八年(一六〇三)から翌年にかけて、加藤清正が画津塘を築いたが、その結果秋津と隣接の六嘉・大島(現在の嘉島町)・飯野(現在の益城町)などの村々は水害常習地となった。

六嘉村(現在の嘉島町)の一部がその害に耐えず集落こぞって安住の地を求めて移転し、



写真 3 ・ 1 8 新村天満宮

そのまま六嘉村に所属していたが、明治八年（一八七五）境界変更、その後秋田村内となる。

その移転した下無田村が、「新村」と呼ばれたのであり、秋津新町はそれに繋がる町名で、当時の苦勞を今に伝えている。

この新村天神は移転した集落の人々の守り神として祀られたことは間違いないであろう。

創建 開基不明

堂 木造瓦葺き 間口二八七釐 奥行三七七釐

神殿 左像 衣冠束帯座像

右像 菩薩座像 円光背 左手白蓮花を捧げ 二重蓮華座

右手膝上に成弁印か

（語りべ学習会）

### 〔石造物〕

### 水神さん

秋津地区には沼山津から西無田に至る田圃や川塘に何ヶ所も水神さんが祀ってある。毎年三月九日、各部落毎に水神さんの祭りが以前はあった。

水害や水不足に悩まされた村人は、水の神様を祭って水に感謝し、豊作を祈ったり、子どもたちを水の事故から守るために「川まつり」をやって川を大切にしたりした。

13 ○ 中無田石塔水神 (マップ番号 33)

所在地 熊本市秋津町秋田字計路 (鉄塔脇)

木山川流域の石塔水神は、水神罔象女神（みずのはめのみかみ）を祀り、祭日は三月八日であったが、現在は九月十九日に変更されている。

形が石塔に似ているので、そう呼ばれていた。元々、裏井手上流端の字計路の中程にあっ

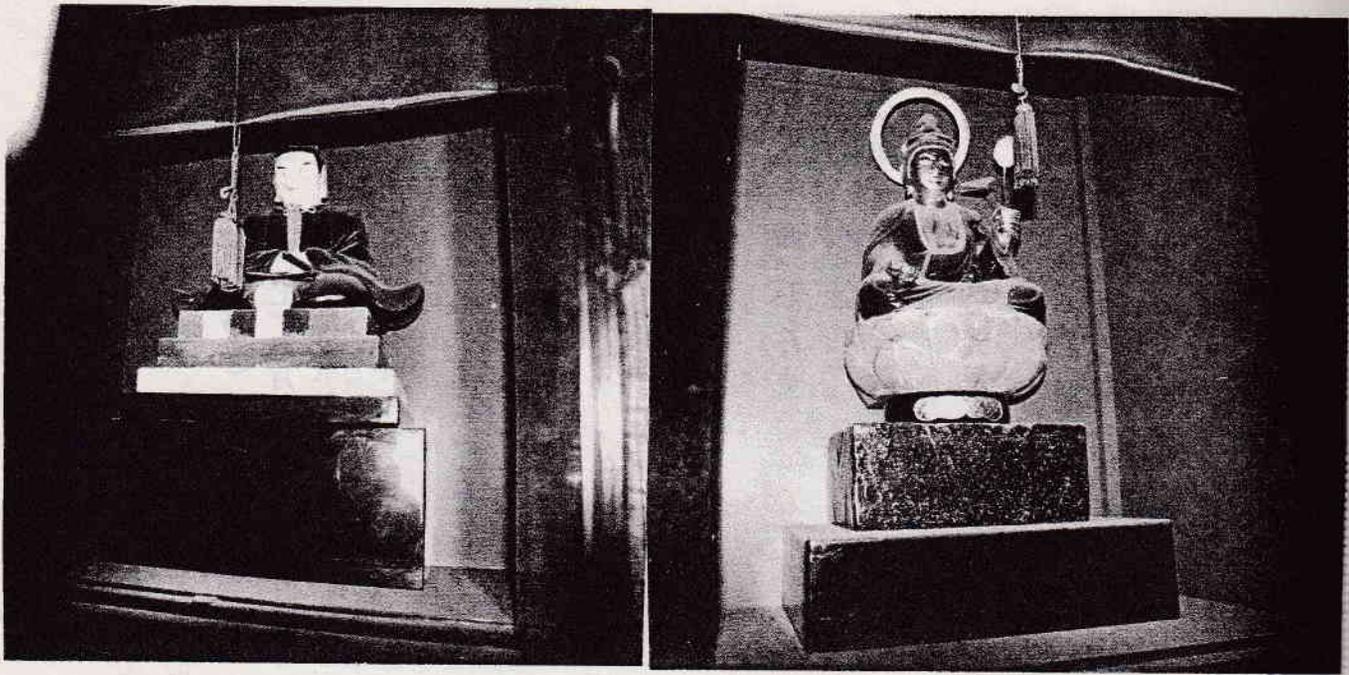


写真 3 ・ 1 9 新村天満宮・左側神像・右菩薩像

であったが、現在は九月十九日に変更されている。  
形が石塔に似ているので、そう呼ばれていた。元々、裏井手上流端の字計路の中程にあっ

たものを昭和五十五年（一九八〇）霊場整備事業で現在地に移転された。

建立年月日 天保六年（一八三五）乙未

水神 高七〇釐 幅三〇釐 奥行三〇釐 上部が饅頭型になっている。

中台 高三〇釐 幅五五釐 奥行五五釐

基礎 高一七釐 幅八五釐 奥行八二・五釐

碑文には、次の碑文が記されている。

それまで水面下で荒地地だった所を文化六・七年（一八〇九・一八一〇）に計路の田開きがなされ、それを感謝して天保六年（一八三五）に建立されたとある。

計路石塔水神碑文

天保六乙年

正面 (すいじん みずはのめのかみ)

水神罔象女命

三月八日祭日

南面碑文

抑幾与路登申来平常  
之水内及四五尺数百年  
来定杭荒二相成居候處  
文化六七巳午年二開明新  
田出来仕候

読み

(そもそも きよると申し来たり平常  
の水内は四五尺に及び 数百年  
来 杭を定め荒れに相成り居り候處  
文化六七巳午年に開き明け 新  
田 出来(しゅつたい)仕り候)

〔注記〕

御惣庄屋 田上文八（格次）

文化四年（一八〇七）八月から文化六年（一八〇九）病死するまで沼山津手永の惣庄屋をつとめる

沢田直助

寛政十年（一七九八）七月二日より中無田村の庄屋となる。

二十八歳。亨和二年（一八〇二）二月西沼山津村へ所替わり

文化五年（一八〇八）六月中無田庄屋兼帯。

文化七年（一八一〇）六月苗字御免惣庄屋直触れとなる。

四十八歳 一領一匹となる。

天保六乙年 ↓（一八三五年）

文化五年 ↓（一八〇八年）

吉本 因幡守 …… 浮島神社社人

光永 四兵衛 ……

沼山 津直助 …… 中無田村庄屋

中台座に

御惣庄屋 田上文八（格次）

新田施主 沢田清七

右 同 沢田直助

右 同立合 沢田才助

右 同 米村吉三良

□七

建立施主 沢田直助

沢田清七

沢田才助

宇兵工

善助

益城町史編纂基礎資料（三）福島文書には次のように記されている。

計路新開 文化四卯年（一八〇七）

一目五町一反八畝二四歩 東沼山津村 西沼山津村 中無田村

右畝数きよ路川杭荒地之内捨置候而 者無益の儀に御座候間

手入床揚以申処申談 当卯年より十五ヶ年季請中無田村内者而水深に付

二十五ヶ年季請に奉願候処願之通被仰付手入仕申候事

14 ○ 中無田間島水神 （マップ番号 34 ）

所在地 熊本市秋津町秋田字月ノ輪（水門脇）

字月ノ輪水門脇の間島水神には次の碑文が記されている。

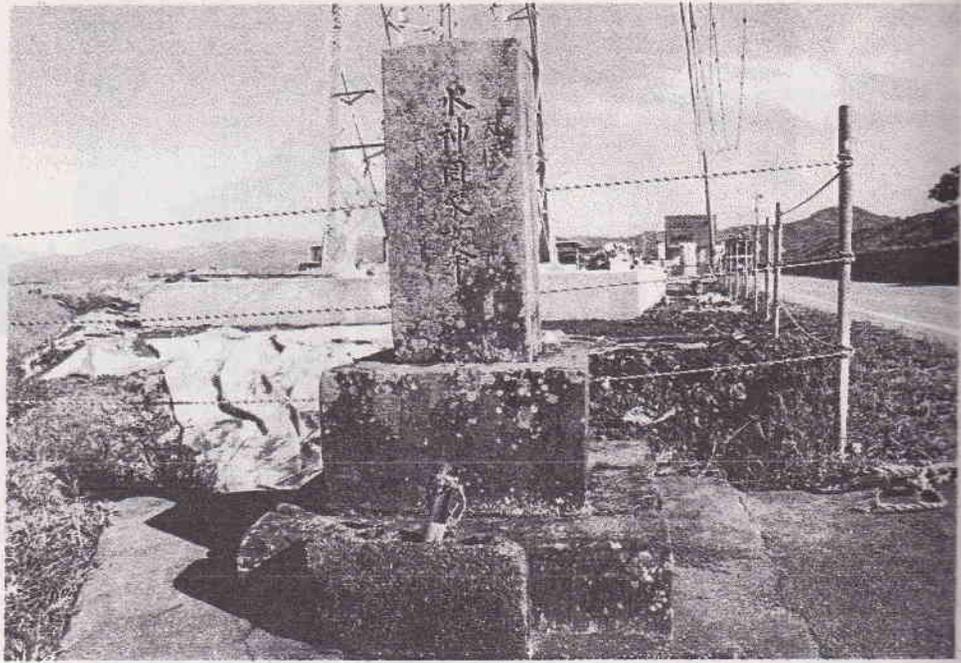


写真 3・20 中無田石塔水神

所在地 熊本市秋津町秋田字月ノ輪（水門脇）  
 字月ノ輪水門脇の間島水神には次の碑文が記されている。

石柱に (すいじん みずはのめのかみ) 水神罔象女命	南面 奉 奇 進 氏子 中 戊辰 十月 願 司 吉本 因幡 守 光永 四兵衛 沼山 津直 助
----------------------------------	---

建立年月日 文化五年（一八〇八）戊辰一〇月  
 小堂石造物 間口 五四呎 奥行五一呎 軒下九四呎  
 屋根高三七呎 間口七八呎 奥行七五呎  
 基礎高 五呎 間口七四呎 奥行六六呎  
 水神 石柱 高 七八呎 幅 一八呎 奥行一三呎  
 もと、赤井川（現木山川）矢形川の旧合流点の川州にあったものを、昭和八年（一九三三）河川改修で字月の輪に移転。昭和五十五年（一九八〇）圃場整備事業で現在地に再移転させられている。

（語りべ学習会）

15 ○ 中無田野間橋際水神 (マップ番号 36)

所在地 熊本市秋津町秋田字前塘ノ元 (野間橋際)

野間橋際水神は、高さ六四呎 幅二一七呎 奥行二二四呎の台座の上に、高さ一二〇呎 幅八〇呎 奥行三〇呎の自然石を御神体として秋津川野間橋際の堤防上に祀っている。



写真 3 ・ 2 1 中無田間島水神

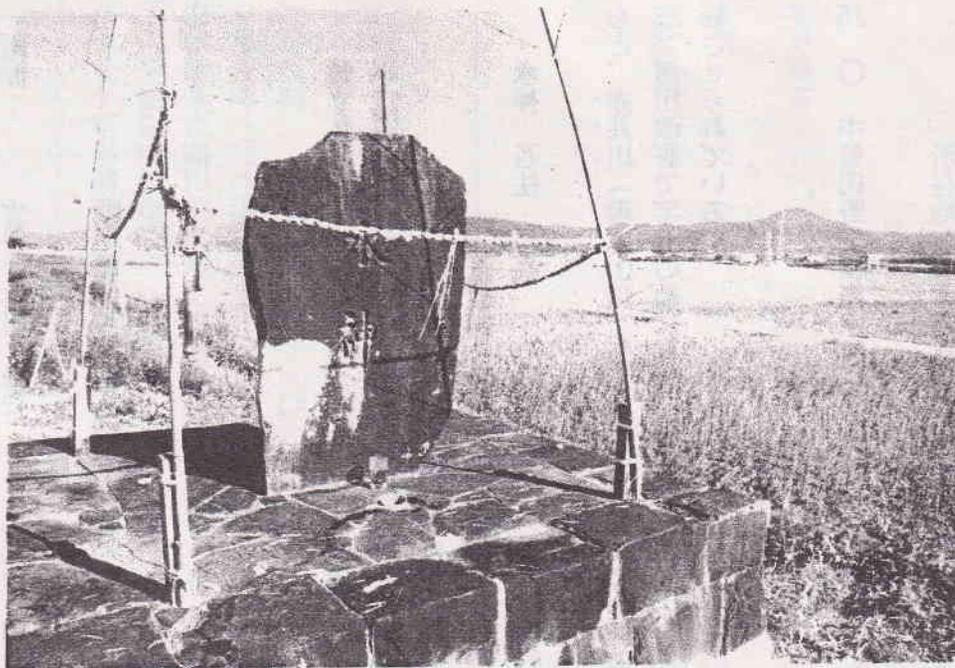


写真 3 ・ 2 2 中無田野間橋際水神

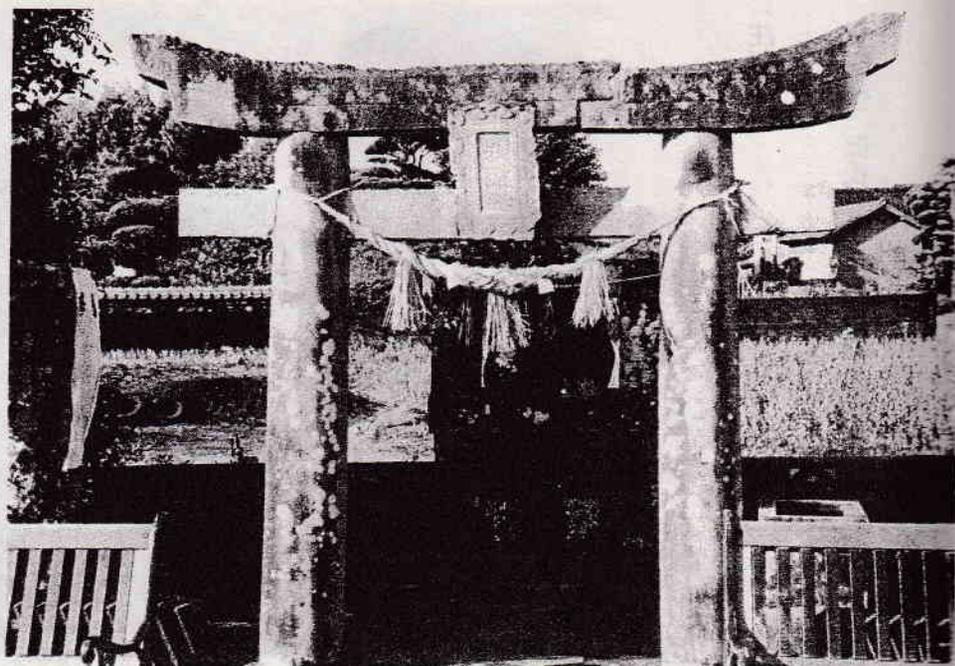


写真 3 ・ 2 3 沼山津水神

次の種文が記されているのみで、記載に説がなく詳細不明。再建としてあるので何かの理由で（水害等で）無くなり、再建されたものと思われる。

水神

大正十年 四月 再建

（語りべ学習会）

16 ○ 沼山津水神

（マップ番号 32）

所在地 熊本市秋津町沼山津 （下沼山津橋上流道端）

敷地は、南面七・二五竪 東面六竪 西面三・四三竪 北面七・七八竪 高〇・七竪のブロック塀の囲いがしてあり、水神としてはかなり大きな造りである。

元秋津川堤防上にあつたが河川改修で現在地に移転されたものである。（ママ）

額に「奉納」・左柱に「秋津村大字沼山津中」・右柱に「明治三十二〇九 二月吉

祥日建立」と記した高一九〇竪 幅一三〇竪の小振りの鳥居が正面に建てられている。

建立は明治五年（一八七二）。

基礎 高七八竪 幅一〇四竪 奥行一〇五竪 の間知石組

水神 高九二竪の玉垣囲いの中に水神が安置

高六四竪 幅五〇竪 厚二〇竪の自然石を面取りして水神とす

高二〇竪 幅七〇竪 奥行五〇竪 の基礎の上に

高一三〇竪 幅三三竪 奥行三一竪 の角柱を面取りした「水神五〇年祭」

の石柱、大正十一年（一九二二）十月一日の刻銘

高四四竪 幅六七竪 奥行三八竪 「明治四四年（一九一一）吉日奉納

沼山津中」とし記された手水鉢

（語りべ学習会）

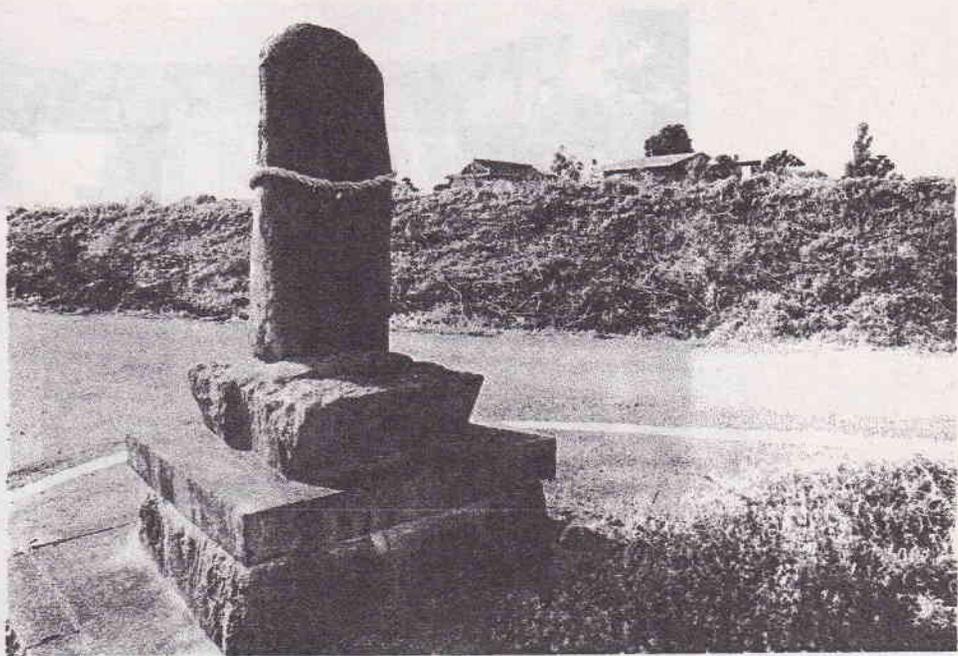


写真 3・24 突井戸水神

〔注記〕

上田龍三郎氏……四・伝説・史伝の項の「かみだりよさんの石油堀り」を参照

17 ○ 突井戸水神

(マップ番号 31)

所在地 熊本市秋津町沼山津字東無田 (沼山津橋上流堤防下)

上沼山津橋上流の堤防下の水神は、昭和十八年(一九四三)五月に水田用水の突井戸工事が完成したことを記念して、昭和二十七年(一九五二)五月に建立された水神である。水神には、次の碑文が記されている。

水神	
<p>西暦一九四三年</p> <p>昭和十八年五月完成</p> <p>会計 上田 隆 沼津秀雄</p>	<p>(台座正面)</p> <p>突井戸工事世話人 区长 福田安彦</p> <p>第一区 竹中数喜 上田庄蔵 光岡 満</p> <p>第二区 松本源平 永田末喜 水上軍喜</p> <p>区长 吉永清三 第一区 馬場一蔵 沼津秀雄 中村茂三郎 蔵田和二郎 中川 有</p>
<p>西暦一九五二年</p> <p>昭和二十七年五月修理</p>	<p>(台座裏面)</p> <p>水神建設世話人 村上半次</p> <p>第一区 吉永政信 上田 紘 松本 正</p> <p>第二区 光岡一行 酒井軍太郎</p> <p>区长 田上又喜 第一区 倉永清光 蔵田和二郎 澤田才次郎 沼川辰彦 梅田豊蔵 吉永孝行</p>

水神碑	高一二五〇	幅五二〇	厚二七〇	自然石
台座	高二五〇	幅七〇〇	奥行九〇〇	自然石
基礎	高四六〇	幅一一八〇	奥行一一七〇	間知石組
	全高一九六〇			

「秋津村略史では次の様に記している」

沼山津懸かりの田は、沼山津堰から取入れる用水のみであったので、早魃の年は用水不足して、夜も眠らず水引をする苦労は一通りではなかった。

しかるに上田龍三郎氏の石油開発事業の一つとして、中津代里に設けられた箇所から湧水するのを、サイホン式によって木山川を越え橋口に導き、あの一帯約三〇町歩にわたる灌漑に成功した。

この効果を認めて集落協議の結果、別に字東無田地内 弥富熊太氏の田地に鑿井することにしたら同氏はその田地を無償で提供された。

昭和十六年（一九四一）計画されたものの、時は世界大戦の真只中「資材不足」で、この事業には多大の苦心をしたが、志内村長の熱意と、区長福田安彦・同吉永清三氏・その他関係役員・地元の人々の並々ならぬ努力によって完成した。

灌漑実には二〇町歩に及び、さらに今まで「畑苗代」だったのがこれにより「田苗代」が出来るようになった。現地に建立された石碑に芳名を録して永久にその功をたたえてある。

（語りべ学習会）

### 地蔵群

秋津には数多くの石地蔵が村中の道の角々にある。

上津代里・中津代里・下津代里など、昔はそれぞれの組によって地蔵を祀つたらしい。

それが今なお有志によって丁寧に扱われ、集落の信仰のものになっている。子どもを大切にしたい証拠でもあると思われる。

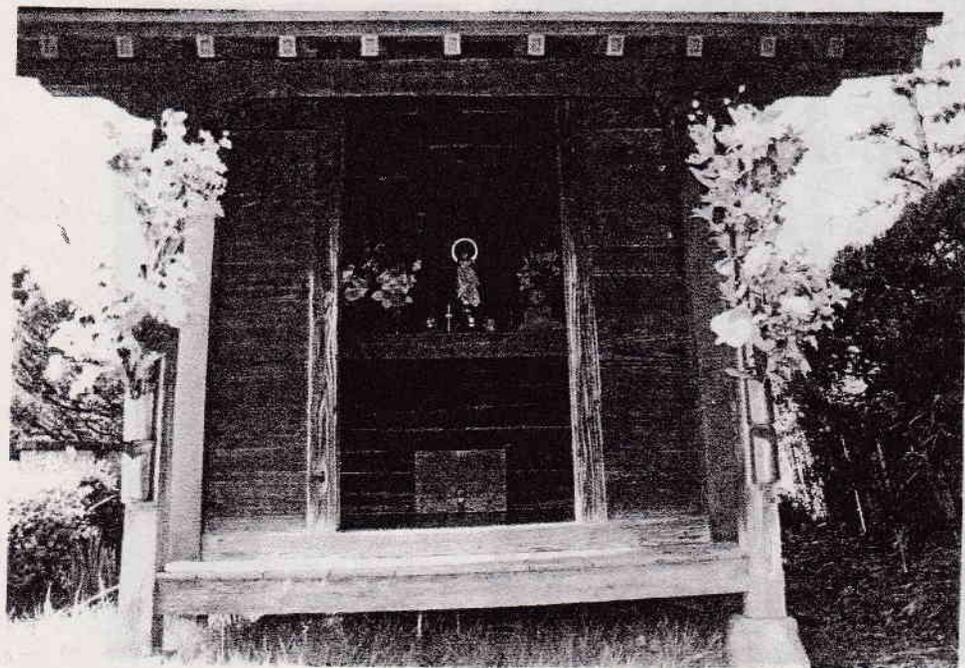


写真 3・25 上津代里・外村組地蔵

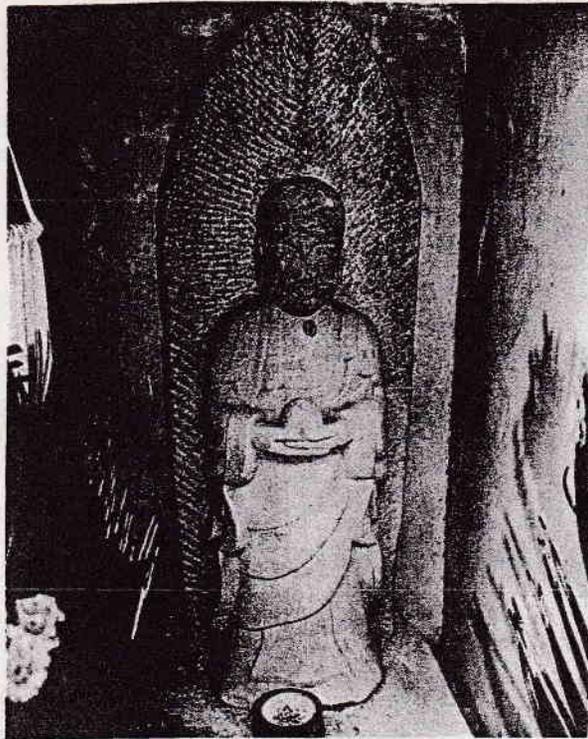


写真 3・26 上津代里・外村組地藏

18 ○ 上津代里・外村組地藏 (マップ番号 41)

所在地 熊本市沼山津四丁目六番六〇号 (上津代里)

沼山津の最東部の通称外村(ほかむら)の道角にある地藏で一問四方の小堂である。本尊は一木像の地藏立像で、岩座上の蓮華座上に立ち、右手に錫杖を持ち、左手を前に出す形である。

台座裏には「安政六年末(一八五九)八月下旬 …… 国家安全奉願上 光輪寺源□」と墨書銘がある。

地藏像は台座幅二三〇 蓮華座までの高さ一二・五〇 仏高三八・五〇 肩幅八〇 である。

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

建立年月日 安政六年末(一八五九)八月下旬

間口一九一 奥行二〇〇 軒下二一〇 屋根高一三〇の木造の堂である。

本尊は、木造造りの円光背で右手に錫杖を持ち、金箔塗りの立像で、円光背までの高さ三八〇 肘張一一〇 肩幅八〇 顔高七・五〇 顔幅 六〇の蓮華座の上に立っている。蓮華座は、高六〇 幅一四〇 奥行一一〇で高八〇 幅二四〇 奥行一五〇の岩座上にある。

台座裏には「安政六年末 八月下旬

当外村 儀平□ 善□ 藤□□

右三人願より尊像 仕直し

奉并さい志き仕直し

国家安全奉願上 光輪寺源□」と墨書銘がある。「仕直し」の文字があるが、安政六年に開基されたものか、又は修理されたものか判らない。修理されたものであれば開基はもっと古いことになる。

本尊脇に、高二八〇 肘張二五〇 顔高一〇〇 顔幅八〇、光背台座なしの石造座像の地藏が安置されている。

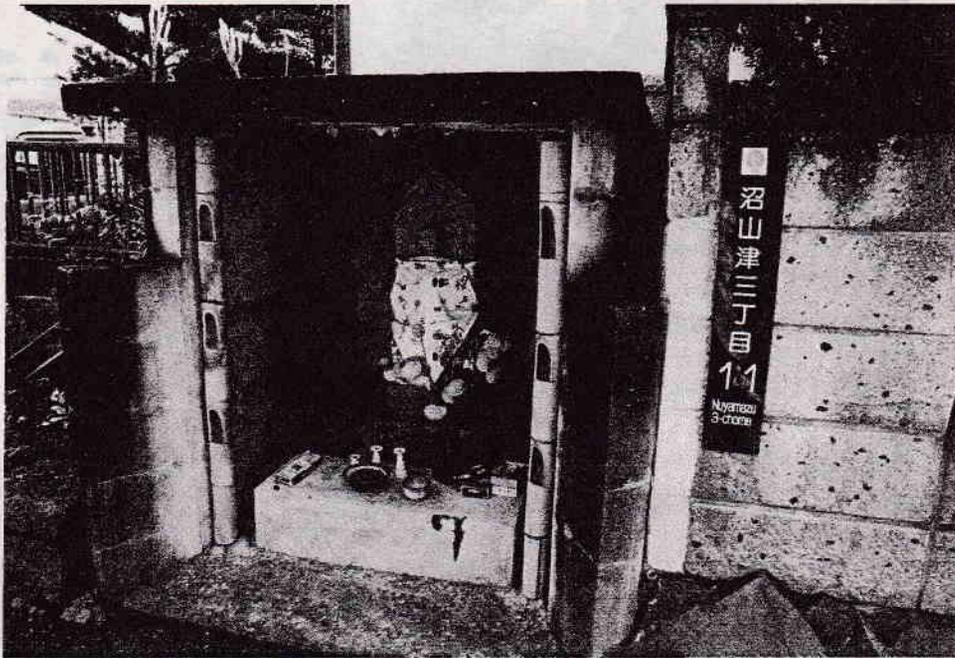


写真 3・27 中津代里・東小路地蔵

地蔵が安置されている。

昭和三十三年(一九五八)一月二四日、「野島政一・上田末記・藤山彦次」を世話人として上組・中組・外村組一同で地蔵尊堂屋根の改造を行っている。

又、平成七年(一九九五)に座主「福島只秋・福島勝也」で、本尊の菩薩に修理が加えられており、更に平成九年(一九九七)一月吉日「泉秀晴・福島秀雄・高木幸義」を世話人として上組・中組・外村組一同で屋根改造が行われている。

(語りベ学習会)

19 ○ 上津代里・内村組地蔵 (マップ番号 42)

所在地 熊本市沼山津四丁目七番 (上津代里)

舟場と呼ばれている沼山津四丁目七番三三号の住宅北側の道路に面して、間口八七釐、奥行九一釐、高一五〇釐の陸屋根ブロック上塗仕上げの祠がある。建立年月日不明。

幅一二五×一〇〇釐、高さ三五釐の基礎、四五釐角・高さ一三釐の台座上に蓮華座があり、その中に中央が盛り上がっている舟形光背を持つ石地蔵が立っている。

舟形光背高九一釐、仏高七〇釐、肘張二五釐、肩幅二三釐、顔高一八釐、顔幅一〇釐である。

大きめの地蔵で痛みも少なく綺麗にしている。光背にも台座にも刻銘はなく、堂内壁面「昭和五十六年(一九八一)九月吉日改修」とだけある。

(語りベ学習会)

○ 中津代里地蔵群 所在地 熊本市沼山津

20 東小路地蔵 沼山津三丁目二番一号 (マップ番号 43)

沼山津の中津代里の旧道沿いには三つの石地蔵がある。

一番東のものは旧会所跡の井戸のある所の南側に入る小路に建てられ、舟形光背高七三釐

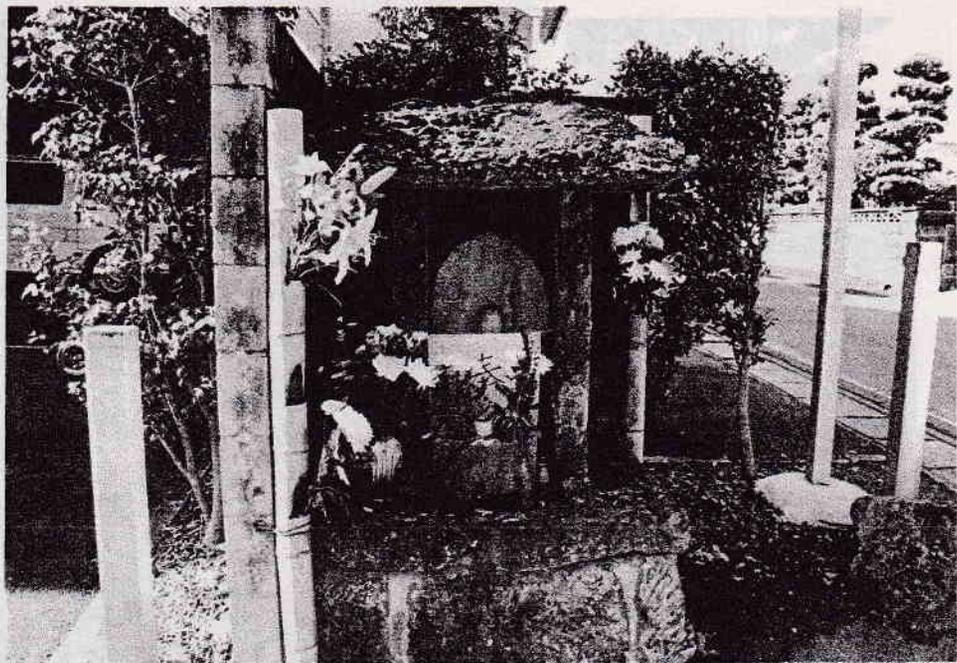


写真 3・28 中津代里・中小路地蔵

で、十三段の台座がある。

地蔵は身高三七段の立像で光背に「寛政五癸丑（一七九三）三月日、若者中建立」とある  
 （熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

地蔵堂 高一五〇段 間口一三一段 奥行一二〇段 ブロック上塗仕上陸屋根  
 地蔵 石造物 舟形光背 光背迄高七四段 蓮華座  
 身高三八段 肘張一〇段 肩幅一一段 顔高八・五段 顔幅七段  
 台座 上台高一四段 幅三〇段 一寸丸みかかった石  
 中台高一六段 三七×三七段  
 下台高一五段 六〇×六〇段

（語りべ学習会）

21 中小路地蔵 沼山津三丁目一三番七号 （マップ番号 45）

次の一つはより西の南へ入る小路の角にあり、三段積みの石垣の上の石屋形の中に鎮座  
 されている。

前の石の花立てには「仲正路組」とあり、本体は舟形光背の中に立像を彫り、「慶応三  
 卯（一八六七）十月二四日」の紀年銘がある。

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

建立年月 慶応三年（一八六七）  
 地蔵堂 高一二二段 間口五四・五段 奥行 四四段 屋根共石  
 地蔵 石造物 舟形光背 光背迄高七七段 蓮華座一二段  
 身高四一段 肘張一三・五段 肩幅一二・五段  
 基礎 石組高五三・五段 ・幅九八×九八段  
 刻銘 光背に「慶応三卯年十月廿四日 花台に仲正路組」

（語りべ学習会）

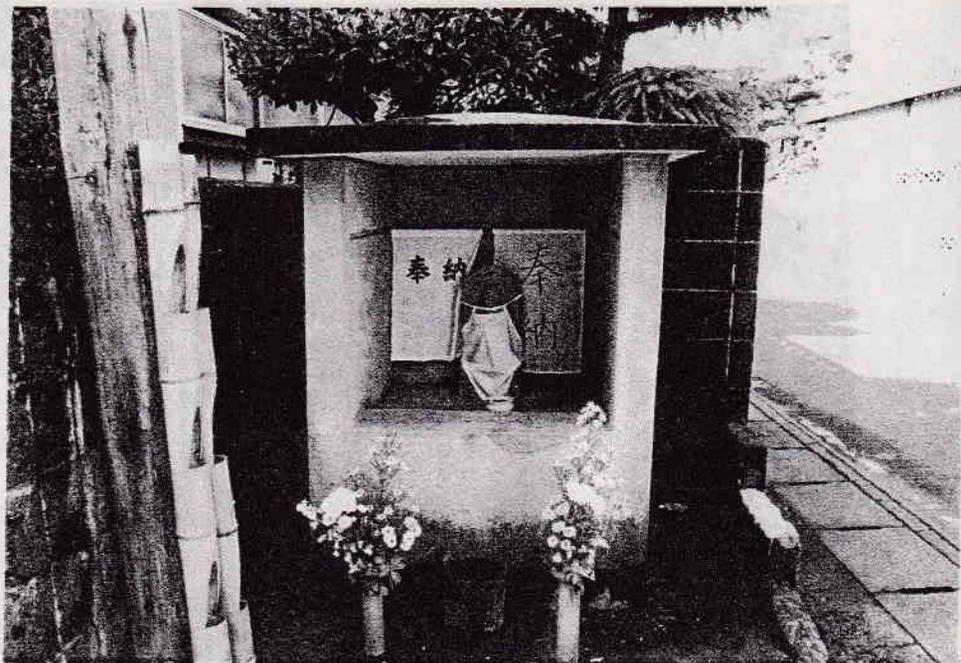


写真 3・29 中津代里・西小路地蔵

次は会所より西の北側へ入る小路の角にある石地蔵で、高さ一五〇釐 間口一〇二釐 奥行八一釐 ブロック造り陸屋根の地蔵堂の中に鎮座されている。

地蔵は、舟形光背の中に蓮華座を刻み立像地蔵が彫り出されており、全高さ四九釐 身高二九釐 肘張一二釐 肩幅八釐 顔高八釐 顔幅六釐で、五二釐の内台座上に立っている。香台に奉納としてあるだけで、他に文字は見えない。

(語りべ学習会)

23 ○ 中津代里地蔵 (光岡氏方) (マップ番号 44)

所在地 熊本市沼山津三丁目九番三七号

沼山津三丁目九番の光岡氏方の道路に面した三叉路に、高さ六六釐 間口六二釐 奥行五五釐のブロック造りコンクリート屋根の祠があり、その中に舟形光背を持った石地蔵立像が、高さ五八釐の台座基礎、高さ六釐の蓮華座の上に安置されている。

舟形光背高さ五〇釐 地蔵の身高さ三四釐 肘張一二釐 顔高九釐 顔幅六釐である。光背に「戊寅文化一五年(一八一八)五月吉日 弥富」と刻してある。

(語りべ学習会)

24 ○ 下津代里・北村組地蔵 (マップ番号 47)

所在地 熊本市沼山津三丁目一四番四八号 (一六〇八番地) (下津代里)

四時軒の東約一五〇釐ほどの沼山津三丁目一四番四八号 (下津代里一六〇八番地) にある。三段の石垣の上に三尺四方の小堂があり、その中に舟形光背をもつ石地蔵が両手に宝珠を捧げ立っている。

光背には銘刻はなく、台石に「安永六年酉二月吉日 西沼山津若者中と記されている。

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

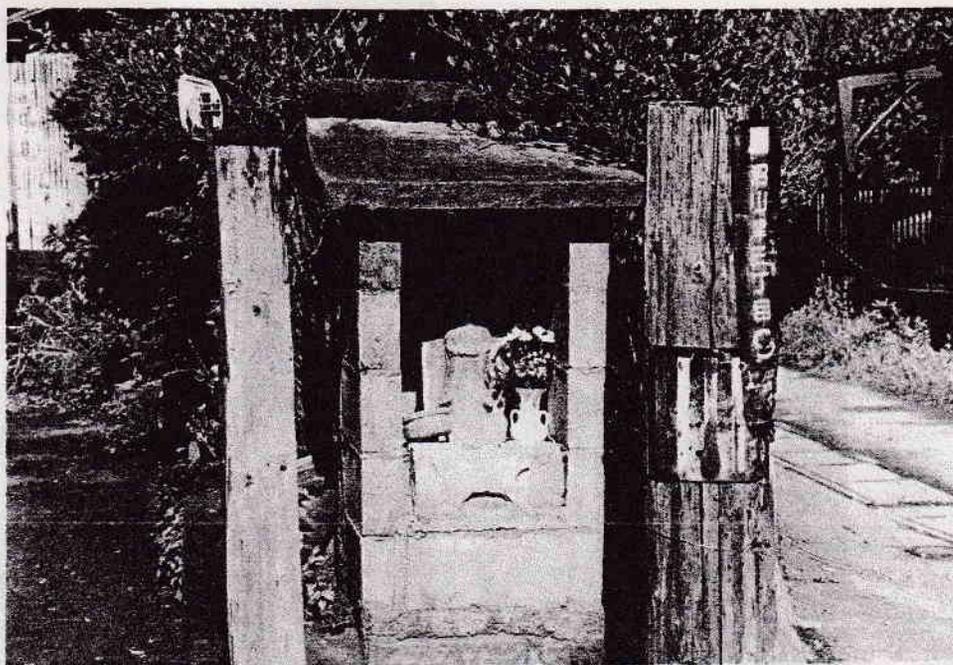


写真 3・30 中津代里・光岡氏方地蔵

建立は安永六年（一七七七）二月吉日。

地蔵堂は、間口一〇一センチ、奥行一〇六センチ、高さ一〇八センチ木造瓦葺き。

高さ九〇センチの石組の基礎の上に、高さ四〇センチ、幅二五センチ、奥行二五センチの台座がある。

石像地蔵は、光背迄高さ六九センチ、蓮華座一一センチ、身高さ三五センチ、肘張一二センチ、肩幅一〇センチ、顔高九センチ、顔幅七センチである。

台座に「安永六年酉二月吉日 西沼山津若者中」の刻銘がある。

（語りべ学習会）

25 ○ 下津代里・須崎組地蔵（マップ番号 48）

所在地 熊本市沼山津一丁目二五番七七号（一六四九番地）（下津代里）

下津代里稲荷社の西、道角を曲がったすぐのところ沼山津一丁目二五番七七号（一六四九番地）に一小堂があり、舟形光背を持つ地蔵石像が安置されている。

顔面は磨耗しているが、両手に宝珠を捧げた立像で、蓮華座の花弁は二重に縁取りされている。光背右に明和元年（一七六四）左に甲申九月とあり、台石はこの地蔵のものであるかどうか不明ながら次のように彫られている。

「俗名 宇吉 恵吉 宇太良 幸吉 茂市 大八 十歳 □もせ」

（熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史）

建立年月日 明和元年（一七六四）九月

地蔵堂 高一四六センチ 間口一一二センチ 奥行九九センチ ブロック造り陸屋根

地蔵 舟形光背 光背迄の全高一〇五センチ 二重蓮華座一一センチ

立像高二八センチ 肘張八センチ 肩幅八センチ 顔高八センチ 顔幅六・五センチ

台座 中台高三八センチ 幅二二センチ 奥行一八センチ

下台高二〇センチ 幅三二センチ 奥行三〇センチ

刻銘 光背右に「明和元年」左に「甲申九月」、中台に「俗名 宇吉 恵吉

宇太良 幸吉 茂市 大八 十歳 □もせ」と記されている。

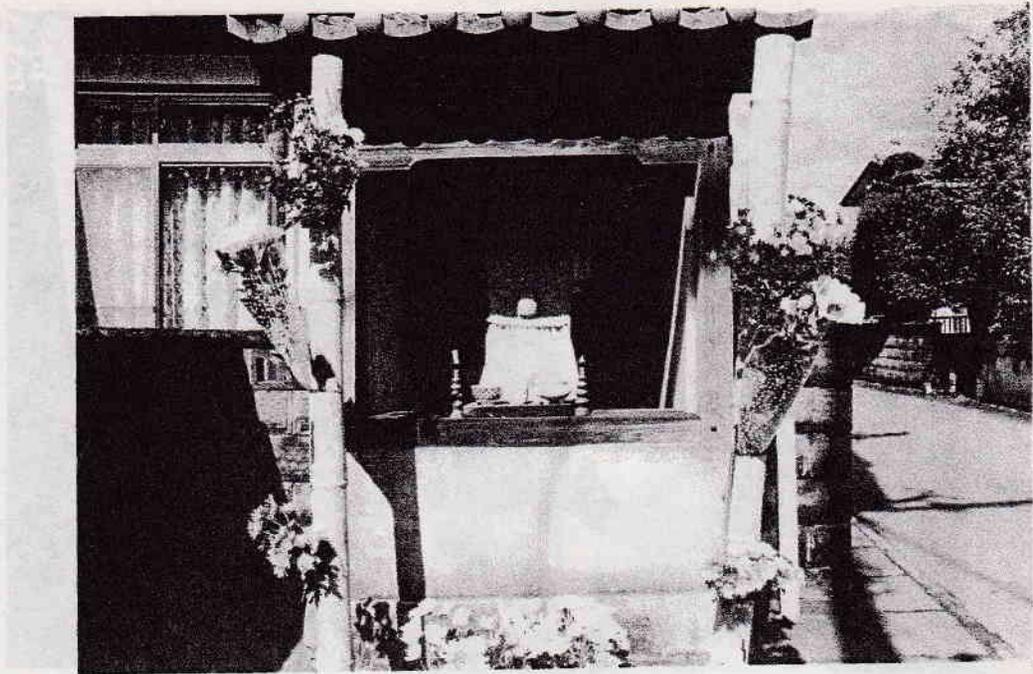


写真 3・31 下津代里・北村組地蔵

光背右に「明治元年」左に「甲申九月」、中台に「俗名 宇吉 恵吉  
宇太良 幸吉 茂市 大八 十蔵 □もせ」と記されている。

五ヶ所(須崎)に一本山(須崎)に高一五八八石(須崎)と云う(須崎)あり」と  
ており、なお「須崎」という小村(こむら)もあつたと伝えられる。(角川日本地名大辞  
典四三 熊本県)

又、字名に「須崎原(すざきばる)」という地名があつたが、「須崎組」とはそれに関連  
があるのかも知れない。元須崎原に住んでいた人達が現須崎組地蔵付近に移住してきたと  
も考えられる。

(語りべ学習会)

26 ○ 下津代里・彼岸花地蔵 (マップ番号 64)

所在地 熊本市沼山津三丁目一七番一号 秋津浄化センター内

(現存しない)

沼山津の下津代里 旧蔵田氏方前にある石祠である。石祠は屋根つきで、屋根の中央に  
破風が設けられている。

中に舟形光背を持った地蔵立像が安置されている。地蔵は二重に縁取りした蓮華座上に立  
ち、袂は風に吹かれて右(向かって)に靡いている。

光背には右に「寛政五年(一七九三)己丑三月日」、左に「弥富氏□□(施主)」とあ  
るが、この石祠はもと秋津浄化センター裏の沼山津貝塚(字貝原)に安置されていたもの  
である。おそらく寛政五年頃、貝原で開墾中に人骨に掘り当てたため、弥富氏が施主とな  
って供養の地蔵を建立したものであろう。

浄化センター設置後もこの地に石祠は現地に存在したが、昭和四五年(一九七〇)現地  
から消失した。

(熊本市東部文化財調査報告書・秋津小百周年記念誌 秋津の歴史)

○ 中無田地蔵群

27 上の丁下組地蔵 (マップ番号 49)

所在地 熊本市秋津三丁目二番五八号



写真 3・3・2 下津代里・須崎組地藏



写真 3・3・3 中無田・上の丁下組地藏